

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【栄和小学校】

⑥	次年度への課題と授業改善策	
知識・技能	既習の学習内容を生かして最後まで取り組み、解答を導き出そうとする学習の積み重ねを次年度も継続していく。あきらめずにじっくり問題に向き合い、取り組む姿勢を育てていくことを通して、教師が個別に必要な支援を講じたり、「ドリルパーク」等を活用しながら基礎的・基本的な問題、既習の学習問題の反復練習を行い、「できる喜び」を味わわせ、「小さな自信」を少しずつ積み上げていく。	
思考・判断・表現	自己の考えに基づき、解答を導き出そうとする学習形態の習熟を目指した取組を次年度も継続していく。調査結果を教職員全体で把握し、実態と傾向を改めて確認する。教職員一人ひとりが、さいたま市の学力向上策「学力向上アクションマップ」への理解を深めるとともに、授業においては、意図的にグループ活動を設定したり、活動の中に共同編集を位置付けたりすることで、協働的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにしていく。	

①	今年度の課題と授業改善策	
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題>国語「主語と述語の関係」に係る問題では、3年生以上すべての学年において正答率が低い。正しい主語を選択することができない。<指導上の課題>主語と述語の関係を正しく理解できているが、教師が十分に把握・評価できていない。	⇒ 全学年において、毎日の宿題として「音読」を継続的に取り入れるとともに、その成果を授業で確認できるようにする。特に国語の授業において「主語と述語」を確認する時間を設定する。【各単元で実施】。毎週金曜日の朝読書の時間を大切に、読み物にふれる機会を多くするとともに、読書の楽しさ・大切さを感じられるような声掛け・指導を行っていく。【毎週実施】。
思考・判断・表現	<学習上の課題>市調査において、「思考・判断・表現」に係る問題はすべての学年において平均正答率に満たない。全国調査においても同様の結果であった。 <指導上の課題>学習に対して児童が意欲的ではない傾向が見られる。	⇒ 一人1台端末のさらなる活用を通して、より円滑な「思考」、正確な「判断」につなげていく。【毎日活用】。学校課題研究における個人研修を軸として、「個別最適な学び」を模索しながら豊かに表現できる児童を育成していく。【学校評価アンケート「授業や話し合い活動の中で、自分の考えを進んで発表しようとしていますか。」の項目で経年比較】

⑤	評価(※)	調査結果 授業改善策の達成状況
知識・技能	B	ポートフォリオの内容については職員会議で共通理解を図り、授業改善に努めている。「書くこと」に関しては、異集団経年比較において3・5・6年でわずかではあるが、偏差値が上昇傾向にある。同集団においては、5・6年生で昨年度と比較して偏差値が上がった。改善策の成果が少しずつ表れている。
思考・判断・表現	B	中間期で報告した取組を継続している。今年度の学校評価における「読書活動の推進」については、肯定的な回答がやや減少したものの、校内の「読書キャンペーン」では、意欲的に参加した児童が多く貸出数も増えた。今後も、取組の二極化に留意しながら、より多くの児童が主体的に本にふれる機会を設け、問題文をじっくりと読みこむことができる力につなげていきたい。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、課題だった主語述語の問題で県平均を上回った。一方で「きょうぎ」という同音異義語のある漢字を文意に合わせて書く問題の正答率が低く、かつ無解答の児童が多かった。作文などで積極的に漢字(熟語)を使わせることで定着させていきたい。算数では、立方体の見取り図についてよく理解できていた。一方で、小数のわり算の計算方法や分速の求め方について、手順や公式が定着できておらず解答できない児童が多かった。	
思考・判断・表現	国語では、「話すこと・聞くこと」の内容では、正答率が県平均を上回る問題もあったが、「読むこと」の内容では大きく下回っていた。物語文で心に残ったところの理由を記述する問題では、無解答率も高かった。算数では、球の直径を使って立方体の体積を求める問題や折れ線グラフから数値を読み取り、条件に合わせて記述する問題といった複合的な問題で無解答が目立っていた。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	3年生以上、すべての学年、すべての教科で市平均正答率を下回る結果となった。しかしながら、5年生国語、算数、理科においては「無解答率」が市平均を下回り、最後まで粘り強く取り組む姿勢が身につけてきたものと思われる。また、社会においては、どの設問においても無解答率が「ゼロ」であった。さらに、6年生においては、国語の無解答率は市平均と同等、社会は「ゼロ」であった。高学年になるにつれて、学習に取り組む姿勢に改善のきざしが見られた。異集団経年比較では、3年生国語・算数、5年生全教科、6年生国語において、偏差値を上げることができた。同集団経年比較では、5年生国語、6年生国語・算数・理科で偏差値を上げることができた。	
思考・判断・表現	3年生以上、すべての学年、すべての教科で市平均正答率を下回る結果となった。ただ5年生国語、算数、理科においては市平均の「無解答率」よりも低い結果となり、さらに社会においてはどの設問においてもほぼ「ゼロ」に近い無解答率であった。6年生においては、社会で無解答率は「ゼロ」となった。異集団経年比較では、3年生国語・算数、5年生全教科、6年生国語・社会において、偏差値を上げることができた。同集団経年比較では、5年生国語、6年生算数・理科において、偏差値を上げることができた。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	国語では、昨年度市学習状況調査において3年生以上すべての学年で課題であった「主語と述語の関係」が、全国調査で国・県平均を上回ることができた。教師が授業において意識した成果が出始めているかもしれないが、5年生以下についても同様の成果を求めるべく、改善策に継続して取り組んでいく。	これまでの取組を継続しながら、書く活動の中で辞書を使って漢字の熟語を使わせたり、基礎基本の定着の学習として、各種筆算の繰り返し練習や、公式を使う既習の学習問題に取り組ませたりする。
思考・判断・表現	B	全国調査では、国語・算数ともに正答率が国・県平均を上回る問題があった。児童質問においても、タブレットの活用に係る設問については国・県を上回っているものがあった。授業の中で効果的に活用できているようである。スクリーンショットを掲載するようになり、プロジェクターの活用場面も増えてきている。	これまでの取組を継続しながら、校内で行う「秋の読書月間」と連動させて児童に多くの本に触れさせる機会をつくる。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)